

「更級小学校の三つの校歌」

(H18年度 PTA 文集『さらしな38号掲載』)

更級小学校 石井 智

本校百年誌(さらしなの里28頁)によれば、本校の校歌は明治四十一年六月六日に「校訓発布記念式典」にあわせて村長臨席の元に披露された。校長による校歌の朗読の後、その歌詞の意味について説明があり、続いて校歌が1番から4番まで(現在はオリジナルの3番を省略している)披露されたようである。同じく百年誌の中でピアノが本校に導入されたのは昭和5年頃となっているので、披露はオルガン(当時は風琴といった)の伴奏によったと思われる。それは同じく百年誌(25頁)に「明治二十五年八月三日に高山校長が風琴購入ニツキ寄附募集二日々奔走ス」「八月二十六日 代金参拾五円の風琴を汲古館に注文ス」「壱拾月四日 本日ヨリ時間ヲ定メテ唱歌ノ教授ヲ為ス」・・・等が記述されており、明治も半ばには、音楽教育が盛んになってきたことが伺われる。

その後明治33年には大風琴(大型のオルガン?)が購入され、続けて明治三十六年には尋常科全部に唱歌が課せられたようである。

この唱歌が授業に取り入れられたのは尋常小学校だけでなく、明治三十年に小学校に敷設された裁縫専修科(裁縫科:村内の婦人に裁縫の技能を教授するために小学校に敷設されたが、明治三十四年に改組され女子補修学校となった)の時間割の中にも、月~土曜日までの二十八駒中2二十五時間の裁縫の授業以外に修身一、家政一、唱歌一ということで「唱歌」が取り入れられている。

本校の校歌は「信濃の国」で有名な浅井洌(きよし)先生作詞であるが、不思議なことに本校の校長室には浅井洌先生直筆(と思われる)の「校歌」の表装額以外に松本中学校(現松本深志高等学校)服部先生作詞と書かれた「校歌とおぼしき歌詞」の表装額、また松本高等女学校(現松本蟻ヶ崎高等学校)の校名入り罫紙に書かれた中澤先生作詞の『校歌』の表装額が三枚掲額されている。

百年誌には本校の校歌を作るにあたり長野師範学校の浅井洌先生、松本中学校の服部先生、松本高等女学校の中澤先生の三者に作詞を依頼してあったが、浅井洌先生の作られた詩を更に訂正をしていただいて決定したものである・・・と記されている。

つまり「校訓」発布記念式典に併せて「校歌」を作ろうという気運が盛り上がり、前年に上記の三人の先生方に校歌作詞を依頼して、三つの「校歌候補」のうちから浅井洌作詞のものを「更級尋常高等小学校校歌」として採用し、明治四十一年六月六日の「校訓発布式」に併せて校歌を披露したものと考えられます(明治41年に更級尋常高等小学校となった)。

浅井洌先生は、ご存じのように明治三十二年に発表された「県歌信濃の国」(明治三十三年北村季晴作曲)の作詞者であり、県下の小学校等の校歌を数多く作詞しているという(ちなみに屋代小学校の校歌も浅井洌による)。

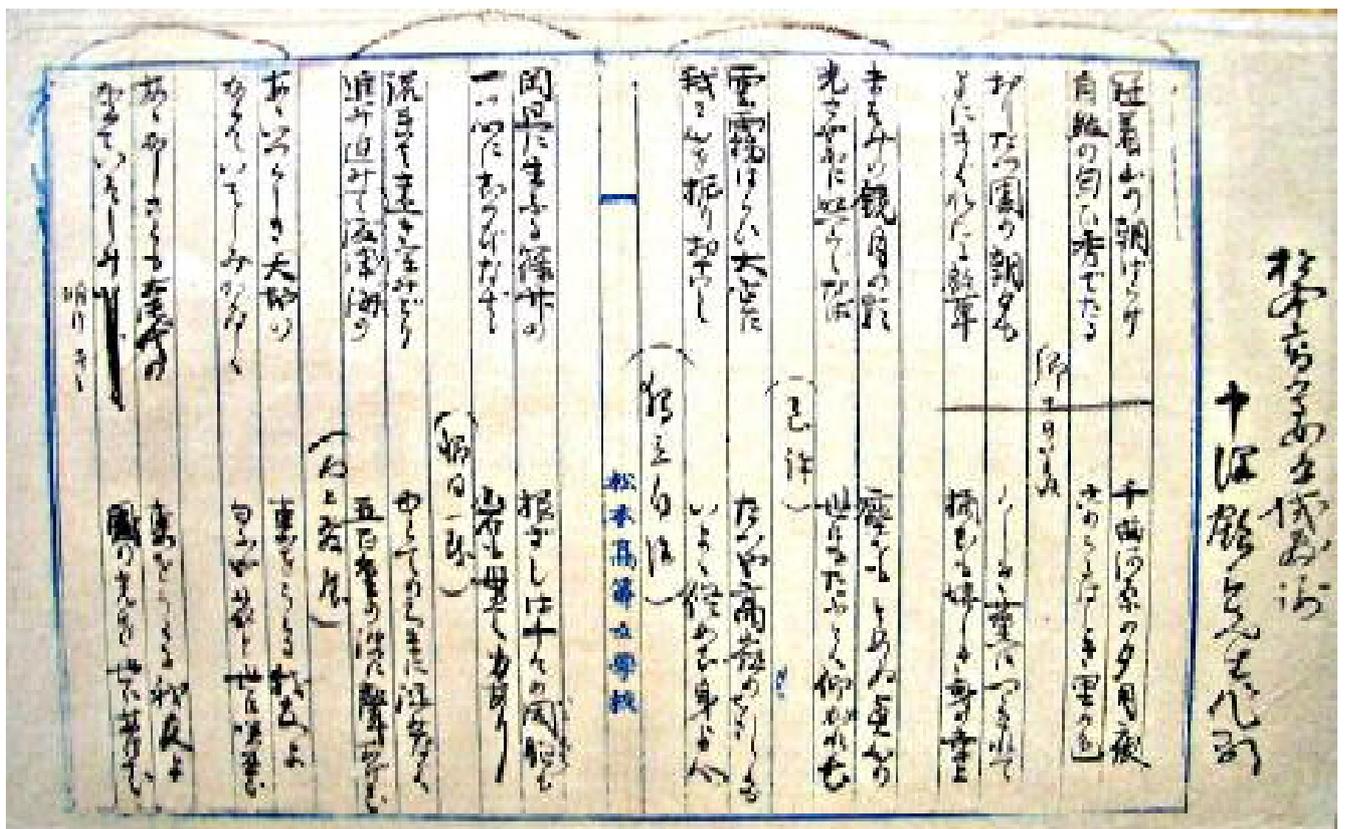
しかし浅井洌先生に作詞を依頼したのに、なぜ同時に松本中学校服部先生と、松本高等女学校の中澤先生にも依頼して、三者のコンテスト（コンペティション）形式で、作詞を依頼したのかという疑問が残ります。今から考えると浅井洌先生は有名な作詞家ですし、コンペ形式で作詞を依頼することなど考えられませんが（大変失礼ではないかと思われる）、当時は「長野師範学校の教授」であっても、まだまだ現代のように「名前が売れていなかった」のかもしれませんが。

浅井先生は長野師範学校（現在の信州大学教育学部の前身）で国漢習字を教授していましたが、校歌を作られた時は、五十八才でした。

作曲家の福井直秋先生は富山県出身で、昭和四年現在の武蔵野音楽大学を創立し学長を長く勤め、多くの音楽理論書や教育関係著作がある著名な音楽教育者です。本校の校歌を作曲されたときは当時はまだ31歳と若く、（明治三十七年長野師範学校に赴任し、明治四十二年まで在籍しました）その在任中音楽の教授や自らが組織した音楽研究会を通して信州の音楽教育の向上に尽力をした新進気鋭の教師だったそうです。

その表装額のそれぞれの校歌とも達筆な墨字でしかも「変体仮名」が混ざっており、判読が難しいところがありますが（素人故の読み間違いもあるかもしれませんが）載録しておきたいと思います。

さすがに、浅井洌先生の字は、現在まで歌い継がれているので、その額装されている巻紙の筆字は間違いなく読めます。中澤先生の文字も服部先生の文字も判読がなかなか難しく塚田哲男さんが、本校に来たときに（塚田さんは本校のクラブ活動「更級探検隊」で児童に指導をしていただいている）判読していただくと思いながら、そのままにしてしまっているのがいつか訂正をしていただければと思っています。まず、松本高等女学校の中澤先生の作詞です。



1, 更級小学校校歌(候補)

松本高等女学校 中澤先生作詞

- 一、冠着山の朝ぼらけ 千曲河原の夕月夜
自然の匂ひ秀でたる このうるはしき里の色
おりたつ園の朝夕も くしき薫につつまれて
よにすぐれたる 教草 摘むも嬉しき 身の幸よ
- 二、まるみの鏡月の影 塵をもとめぬ真心の
光さやかに照らしなば 世にもたふとく(尊く)仰がれむ
雲霧はらい大空に たつや高嶺のををしくも(雄々しくも)
我ら心をふりおこし いよいよ修めむ 身よ心
- 三、岡辺にはふる篠竹の 根ざしは千々も同胞(はらから)も
一つ心にむすびなば 岩も貫く力あり
流れは遠き深みどり ゆくてのままに淀みなく
進み進みて渡津海の 五百重の波に 声あげむ
- 四、ああ うつくしき 天地の 恵をうくる我が友よ
かくていそしみ かぐわしく 匂ふや花と世に咲かむ
ああかしこくも 大御代の 恵をうくる 我が友よ
かくていそしみ明(あきら)けき 国の光を世にあけむ

- (1)朝ぼらけ：朝おぼろげにあけてくる頃。あけぼの、しののめ
(2)教え草：教える材料・教材
(3)まるみ：丸ろみ、円形
(4) 渡津海(わたつみ)海の神
(5) 五百重(いほへ)：数が多いこと

中澤先生の作詞の校歌は

一番の前段は「冠着山、千曲川」と他の校歌と同じように「麗しきさらしなの里の情景」を詠っています。特に朝ぼらけ・枕草子に「春は曙」という記述がありますが、そのような光景「ほの明るくなつてぼーっとかすんだような夜明けの更級の里の情景」を想像させます。後段は「校歌」らしく「教え草を摘む」(学力を身につける意)ことの幸い(教師と児童生徒が一体となって学ぶ情景)」を詠っているようです。

二番の前段は平安の昔から知られた「姨捨山にかかる月影」の素晴らしさを「まるみの鏡 = 欠けてない丸い月影」が正直で清らかな澄んだ真心を清かに照らせば、誰からも仰ぎ

見られるような立派な人になれると表現しています。

後段は「心を奮い立たせて学べば心身共に大きくなり雲の上に雄々しくそそり立つ冠着山のようにになれるのだ」と表したものと思います。

三番の前段は「岡辺に群れて生えている篠竹のように、それぞれは細く根っこも別々だけれども同胞（はらから）として、心を一つに結んで物事に取り組めば篠竹が岩も貫いて生えてくるように力が出てくるのだと諭しているものと思います。

後段は「深く悠々とよどみなく流れていく千曲川は、流れ流れて大波小波（全員が共同して）が押し寄せている（声をあげている）渡津海（海神が住んでいる日本海の荒海）へ続いているのだ」と表しているものと思います。三番は共同して事に当たることの大切さを述べているものと思います。

四番の前段は「美しく自然の恵みを受けている更級の子もたちは勤勉に励んで社会に出たときに、馨しく匂う大輪を咲かせてほしい」、後段は「恐れおおくも大御代（天皇の治世）の恵みを受けている更級の子もたちは、勤勉に励んで国の威光を世界に放って欲しい」というところでしょうか。

2, 更級小学校校歌（候補2）

松本中学校 服部先生作詞

一、世に名をたてし更科や 姨捨山に影すめる
月の出で入り時あるは これぞ至誠のをしえ(教え)なる

二、田毎にうつる其のさまを 学びの道によそへつつ
独立自治の徳たてて おのおの光を放たらむ

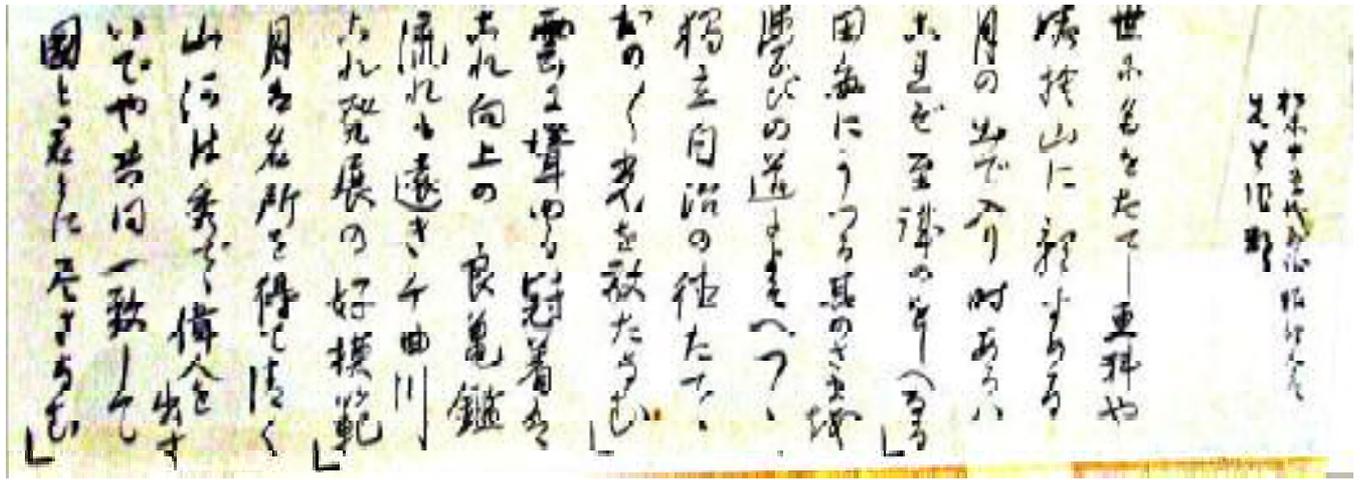
三、雲に聳ゆる冠着は これ向上の良亀鑑
流れも遠き千曲川 これ発展の好模範

四、月は名所をえて清く 山河は秀でて偉人^{ひと}を出す
いでや共同一致して 国と君とに尽さなむ

至誠：きわめて誠実なこと、真心

学びの道によそへつつ（寄^よふ 寄し添^そふの約）：学びの道に寄り添って言えば

亀鑑：亀は吉凶を占う物、鑑は照らして物を見るの意味で行動の基準となる物（模範）（広辞苑）



服部先生の作詞の意味は

- 一番は「更科の名は世の中に大いに知れ渡っている。その更科の姨捨山（冠着山）に懸かる月は清く神々しく輝いている。この月が清く輝いている様は、これこそ人が誠実（真心）に生きなければならないという教えとなろう」
- 二番は「田毎に映っている月の輝きは 学びの道になぞらえて言えば、一人一人が独立・自治の徳を打ち立てて 一人一人が光り輝いている様を表しているようだ」
- 三番は「更級の里から見える雲に聳える冠着は、謂わば児童生徒にとってはより良く向上するための高い目標になろう。また悠々と遠く大海にまで流れる千曲川は、児童生徒一人一人が未来へ（遠き）大きく発展（海のような）するための模範となろう」
- 四番は「月は「冠着山」という所を得て神々しく輝いている、悠々と遠きに流れている千曲川、このような自然豊かな更級の里は多くの偉人をだしている。 さあ児童生徒は心も体も共同一致して、国と君（天皇の治世）とに尽くさなくてはなりません」

と訳してみました。

3 , 更級小学校校歌 (採用)

浅井 洌 作詞
福井 直秋 作曲

- 一、冠着山の峯高く 千曲の川の水清し
さやけくすめる更級の 月影てらす山と水
- 二、学びの道を一筋に 心の月の曇りなく
人をたのまずおのがじし たゆまずうまず進むべし
- 三、世に立つ後は何事も 心あわせてへだてなく
生業なりをはげみて家の富 国の富をもつくるべし
- 四、聳ゆる山のいや高く 流るる川のいや遠く
月にみがきてさらしなの 里の名を世に伝うべし

浅井清先生作詞の校歌は、他の二人の先生の詩より「言葉遣い」的には平易に見えます。一番は雄々しく聳える冠着山や、清い水が流れる千曲川に月影が照らしている麗しの更級の情景を詠っています。

二番は学びの道を神々しく光る月のように澄んだ心で一筋に努力して、独立独歩人を頼らずに、弛^{たゆ}まずに倦^うまずに（ゆるまないで、だれないで）前へ進みなさいと詠っています。

三番は通常は歌わずに現在は四番を三番として歌っていますが、

社会に出たならば何事も心を合わせて皆で協力して「生業（なりわい）＝家業・仕事」に励んで家の富や国の富も豊かにしなさいと言っています。

四番（現三番）は一番で歌った「冠着山」と「千曲川」がまた出てくるのですが、一番の「更級の里の麗しき情景」だけでなく「いや高く」「いや遠し」と「ことさら「高さ」「遠さ」を強調しているように見えますから、中沢先生の二番や服部先生の三番と同じように高い目標、遠く流れていく未来（大海原）を実現できるように、清々しく照らす月のように心を磨いて努力して、この更級の名を世に伝えなさい」と詠っているようです。

この浅井淵先生作詞の本校の校歌（明治 41 年作詞）4 番の「月にみがきて更級の里の名を世に伝^うべし」と、明治 32 年に作詞された「信濃の国」の 4 番（変調しているところ）「くる人多き筑摩の湯月の名にたつ姨捨山 するき名所と風雅士が詩歌に詠みてぞ伝^えたる」との類似性について「更級への旅」著者の大谷善邦さんは「『更級への旅 No.18』で、本校校歌は信濃の国の四番の「伝^えたる」をさらに一步進め、由緒ある更級の里なのだから、後世に「伝^うべし」、つまり伝^えなさいと言っていると解説しています。つまり更級小校歌の四番は信濃の国の四番をベースにつくられているのではないかということです。

三者の詩はどれも平安の昔より知られた麗しき里の情景を、主として「雲に聳える冠着山（姨捨山）」・「月影」と悠々と遠きに流れる「千曲川」を中心とした更級の自然になぞらえて児童生徒の生き方について説いているものと思われます。

また、本校校歌が制定された明治 41 年当時の時世は、日清戦争（明治 27 ~ 28 年）、日露戦争（明治 37 ~ 38 年）を経て、富国強兵が進められ、また「天皇の治世」のために国民は頑張ろう・・・という時代であり、校歌（候補）の詩の中にその時代背景が伺われます。また校歌の制定は「校訓」発布記念のためでもあるので、この校訓はそれぞれの作詞者にも当然届けられていると思われ、校訓がそれぞれの校歌の作詞に生かされているようです。

なお校訓については百年誌から以下に引用しておきます。

校訓は前年五月八日の職員会に於て制定の協議がなされ、同年六月六日発表されたが、この日校歌発表の前に発布記念式が行われた。校訓は爾後通信簿に収載され生徒の相守るべきものとされた。

校 訓

本校生徒タル者ハ 常ニ至誠ヲ旨トシ、独立自治ノ習慣ヲ養ヒ、協同一致ノ美風ヲ擧ゲ、以テ向上発展ヲ期スベシ
是ノ如キハ則チ、善良ナル生徒タル所以ニシテ、抑亦上聖意ニ副イ奉ル所以ナルベシ

通信簿の関係を調べてみると、明治四十一年度までは学校家庭通信簿の見出しに右の校訓が収められ、次いで家庭ニ対シテノ希望

イ、総テノ所持品ヘ必ス姓名ヲ記入シテ下サイ

ロ、成ルベク欠席遅刻早歸ノナイヨニシテ下サイ

ハ、毎日トノクラ井ツツカ必ズ復習ヲサセテ下サイ

尚出来ルダケノ家事ノ手伝ヲサセテ下サイ。ケレドモ児童ノ怠惰カラ手伝ノ為メニ復習ハ出来マセントカ「復習ガアルカラ手伝ガ力出来ナイ」ナド云ハセタクナイモノデアリマス。

ニ、学校ニ対シテ御意見アラバ直接学杖ヘオシラセ下ダサイ。

ホ、時々成績表ヲ御覽ニナツテ精々御注意ヲ願ヒマス。マタ御ムネニオチヌ点ガアリマシタラ其都度御申越シ下サイ。

ヘ、言葉ヤ行儀ヲヨクスル様ニ御注意ヲ願ヒマス

となっていてその後毎月出欠表・成績表・体検査表・通信事項と続いているが、明治四十二年には、校歌が加えられ、四十三年に初めて勅語・詔書が通信簿の中に印刷されている、そして

一、教育の本旨

二、時間を大切にすること

三、勤勉の涼風つくること

四、質素儉約を旨とすること

五、正直を守ること

六、礼儀をおもんずること

七、公德をおもんずること

八、衛生にかかわること

九、敬愛を以て人にまじわること

十、自治の心をやしなうこと。

と、なって明治教育の基本方針がほぼかたまってきたようである。